

## 特集にあたって

# “子どもと家族中心”の 症状マネジメントを考えてみよう！

小児がんの診断・治療技術の進歩により、5年生存率が7～8割となるとともに、支持療法も発展し、小児がんの疾患や治療に伴う症状への薬物療法の選択肢が増えました。また、薬物療法と併用できる多様な非薬物療法の効果が報告されてきています。それにもかかわらず、小児がんの子どもの療養中の症状が十分に緩和されているとは言い難い現状があります。症状が緩和されないと、子どもや家族の生活に大きな影響を及ぼし、治療を受けている子どものQOLを低下させてしまいます。

世界保健機関(WHO)が1986年に出版した『がんの痛みからの解放』が1996年に改訂されて以来、22年ぶりに大幅な改訂が行われました。そして、2021年4月、日本語版『WHO ガイドライン 成人・青年における薬物療法・放射線治療によるがん疼痛マネジメント』<sup>1)</sup>が刊行されました。改訂により、疼痛緩和のめざすところが、かつての「痛みからの解放」から「患者が許容できる生活の質(QOL)を確保できるレベルまで痛みを緩和すること」に変更されています。これは、目標を下げたということではなく、疼痛緩和の本来の意味、すなわち、「その人がめざす、その人らしい生活が送れること」を強調し、難治性の痛みを完全に取り除けなくても、ケア提供者にはできることがあるということ、疼痛緩和によって得られる利益とリスクのバランスをとるべきことを示しています。

本特集のテーマ、「小児がんの子どもの症状マネジメント」がめざすのは、子どもが治療を受けながらもその子らしい生活、その子が望む生活が送れること、そして子どもの家族もその家族らしい生活、その家族が望む生活が送れることです。子どもの生活は、子ども本来の姿、よく“食べる”，よく“眠る”，定期的に“排せつ”する，楽に“呼吸する”，年齢相応の“活動をする”，そのような生活を保てるように“休息をとる”ことが日々保障されていることが大切です。そして、子どもと家族が共に“当たり前のことを当たり前にする”といったような日常を積み重ねる

ことで、からだところの成長や発達を促していくことだと考えます。

本特集は、このような“子どもの生活”という視点を大切に症状マネジメントを読者の皆さまに考えていただく機会となるように、副題を「その子らしい“生活”を支えるために」とし、症状別ではなく、子どもの生活のありようを軸とした構成にしました。また、症状は身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな症状が単独で存在しているのではなく、それらが複合的に連鎖し、子ども自身は全人的苦痛として体験しているという症状のとらえ方、主体である「子ども」と「親」と共に行う症状マネジメントをめざすことを大切にしていきたいと考えています。

そのような企画の意図をくみ取っていただいた、小児がん医療・看護に携わる小児科医、小児看護専門看護師、当分野でご活躍の多職種の方々に執筆していただきました。読者の皆さまが日々のケアのなかで、小児がんの子どもの症状が緩和されず、子どもや家族の望む生活が送れていないとつまずいたときに本誌を開き、何か小さなヒントが得られるものとなることを願っています。

## 【文献】

- 1) World Health Organization (木澤義之, 塩川満, 鈴木勉・監訳): WHO ガイドライン 成人・青年における薬物療法・放射線治療によるがん疼痛マネジメント. 金原出版, 東京, 2021.

平田美佳 Hirata Mika

埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科/小児看護専門看護師

有田直子 Arita Naoko

高知県立大学看護学部

込山洋美 Komiyama Hiromi

日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程/  
小児看護専門看護師